純・愛・小・説・集

繪本の騎士

藤原審爾

繪本の騎士

藤原審爾

実業之日本社

繪本の騎士

昭和五十六年七月二十五日　初版発行

著　者　藤原審爾

発行者　増田義和

発行所　実業之日本社
本社　東京都中央区銀座一―三―九
電話　〇三（五六二）二〇五一（編集）
〇三（五三五）四四四一（販売）
振替　東京一―三二六一〇四
支局　大阪市北区曾根崎二―十二―七
梅田第一ビル内
電話　〇六（三一二）一五七三

印刷所　東京研文社

製本所　共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えいたします

© S. Fujiwara
0093―502470―3214
Printed in Japan

繪本の騎士／目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ふたりだけの湖　7
道ばたの二人　45
愛するひとはただ一人　87
贈られた女　109
繪本の騎士　137
女神が死んだ日　187

装画／石川忠一
装幀／サン・プランニング

繪本の騎士

ふたりだけの湖

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

素子が劉子雲をはじめてみたのは、滝田統一と大学の近くの喫茶店にいた時だった。

劉子雲は、美術の講師の山田肇と画家のような男やなんかと四人連れで、その店に入って来て、素子の斜め右手のテーブルに腰かけ、盛んに議論しはじめた。劉子雲は、素子のほうにむいて腰かけており、沈痛でもあるが、毅然としたものを感じさせる面持ちで、黙ってその議論を聞いていた。大学での仲間の男子学生が一様にもっている優柔な感じが、劉子雲にはまるでない。風貌も眉が濃く秀でて、目が凜と力づよい光りを放っており、凜々しい、年若い武芸者のような感じである。色も白く大柄で、白梅と若武者という雰囲気が漂っていて、素子は、おやっと思った。

素子はもともと地味なたちだし、父親がこの地方大学の文学部の教授だから、父親に気兼ねして派手な行動を慎んでいる。化粧もしないし、服装にも気を配っている。ほかの女子学生達のように男子学生にとりまかれて、分泌をよくすることにも、あまり興味を覚えない。こんなふうに、男性をみて、素敵な人だと思ったりするのは、めったにないことである。しかし、そんなことでも思っていなければ、気がすまないほど、素子は滝田統一をもてあましていた。

滝田統一は実際つまらない男である。素子が大学へ入った二年前には、滝田はいっぱしの活動家のように、学内闘争をやっており、素子たち一年生に始終ハッパをかけに来ていたのだが、いつの間にか様子が変り、今では徳久洋のとりまきの一人になっている。徳久洋はこの鳥取では知られた観光業者の息子で、金には全然不自由しない。ムスタングに乗って大学へ通い、とりまきをのせて、温泉場の徳久観光経営のホテルへ出かけ、どんちゃん騒ぎをして、それを得

意がっている。女子学生百人斬りという台詞が好きな、つまらぬ男である。その徳久洋が素子を招待したがっている、明日玉造温泉へ出かけることになっている、おれの顔を立ててつきあってくれよ、などとさっきから滝田は繰返し喋っているのである。素子は徳久洋などには全然興味がない。きっぱり断われればよいのだが、断わるとそれを根に持って、なにか仇をされるかもしれない。徳久洋はそういうことをやりかねぬ程度の男なのである。それで素子は遠廻しに、そういうことには興味もないし、親しくない友達とは話題もない。お互いに退屈するだけよというふうに、断わったのだが、滝田が単純で、言葉を額面通りにしか受けとらない。脈が十分あるというふうに思っているらしく、あるいは一押し二押しという主義なのか、ともかくしつこく喰いさがって、素子を放そうとしないのである。いいかげんうんざりし、頭にきていた時、劉子雲をみたので、余計劉子雲が男らしく見え、おやっと思うようになったのかもしれない。ちょうどその時、時折、家に遊びにくる文学史の助教授の佐伯が、店に入ってきた。どうやら山田たちの仲間らしく、山田たちに手を挙げながら、その席へ近づいてきて、素子に気がつき、

「素っちゃん、おやじさん、帰ってきたかい」

と声をかけ、素子の隣へ腰をおろした。じろっと滝田を見た。滝田の評判は悪いので、佐伯のそんな態度には、素子を守るような気配が濃厚に出ている。滝田は密着出来ない相手は苦手である。苦手なことは避けるという安易なたちである。たちまちもじもじと落着かなくなり、

「そろそろ出ようか」

と伝票をもって立ちあがった。むろんこれ以上、滝田とつきあう気はない。素子は、

「わたし、残るわ、じゃあね」

と滝田の顔も見ずにそっ気なく言い、馴々しく佐伯のほうへ、笑顔をむけた。
「昨日の晩、東京から電話があって、明日帰ると言ってたわ」
憤然として滝田が肩をそびやかして出て行くのを、佐伯は、なんだ、あいつと呟きながら見て、テーブルのむこうへ移っていった。
「少々遅くなってもいいだろう、夕飯をおごろう。ちょっと待ってくれよ、な」
佐伯は素子がうれしがるのを見てから、横むきになり、山田たちの話を聞きはじめた。
話題は韓国のことで、さっきから山田が最近旅行してきた韓国の様子を、連れの仲間に話している。山田は韓国の民衆が想像と違い国づくりのためにいきいきと働いているという様子を、あれこれの例をあげて話しているのだが、画家風な男ともう一人のちぢれっ毛の男は、そういうことを認めようとしない。偶々山田がそういう部分を見ただけで、民衆の労苦に触れなかっただけだという。ちぢれっ毛の小柄な三十すぎの男は、とりわけ強硬で、雄弁でもある。後進国の近代化というのは、要するに経済主義であるから、優先されている企業の連中は、相当以上の恩恵にあずかっているだろうから、いきいきとしているかもしれないが、皺よせをうけている農民達は、果していきいきとしていられるだろうかね、などと言っている。山田は、それに応えて、自分もそういうふうに思っていたのだが、実際にこの目でみて、その考え方がすこぶる一般的なものだと気がついた。たしかにその通りではあるが、だからといって一様にその被害に喘がないところに、人間は存在するんだよと言っている。日本が明治と先頃の経済高度成長の二度の試みで、人心を荒廃させたからといって、よその国がおなじ轍を踏むとは言えないだろう。どこの国にもおなじような革命が起り得ないように、それはたしかなことなんだと

も言っている。
しかし画家風な男とちぢれっ毛の小柄な男は、その感じはわかるが、それは遅いか早いかの問題にすぎないんだとあとにひかない。佐伯は二人と山田の中間くらいの考えを持っているらしく、とりなすように話へわりこんだ。
「劉君の意見を聞いてみようじゃないか。どうなのかね、実際は」
劉子雲は、そういう質問で、抑えていた感情が堰を切って流れだし、胸に満ちたように血の気が顔へのぼり、ぼおっとあかくなった。いちど彼は、
「ぼくの国のことですが、ぼくは一度も行ったことがないですから、なにもいう資格がないですよ」
とためらいがちに言ったが、すぐそのあとを真摯な感じで続けた。
「ぼくの個人的な関心は、いきいきとしているかどうかというようなことではなくて、みんながどうすればやって行かれるようになれるか、というようなことなんです。故郷の家は子沢山で、普通の働きではやって行けない。海は広いが、北は北鮮、ソビエート、中国、南は日本で、海をあてにすることは出来ない。土地はせまく小さく山が多くて農地も少ない。山からとれるものは石灰とその他とるに足らないものしかない。国中の人間が無事にたべて行くためには、将来に希望をもって生きて行くためには、外資による工業化より、さしあたって方法はない。今、たべずに建設ばかりするわけに行かないんですから。ぼく等の友達で、国へよく行っている連中の話では、そういう国のおかれた状況をみんなよく知っており、ともかく十年なり二十年なり、歯をくいしばってがんばろうと思っているようですよ。その意気が、いきいきとしてみ

えるのかもしれませんね。そういうふうに自主的にものを考えることが出来るのは、独立したということでしょう。独立のよろこびというものは、統制の不自由さをはるかに超えたものではないでしょうか。少なくともぼくはそういう感じですよ」

ちぢれっ毛の男が、参った参ったと言い、山田が一緒に言った。

「山だって植林させない、陶器もつくらせない、そういうことを占領中日本はやっていたんだからね。独立というのは、人の理想に関与するほどの、深い内容をもっているんでね。そのよろこびは、われわれには測ることが出来ないが、そういうことが希望を抱かせているのかもしれないね。ともかく、出かけて現実の状況を見てくることをすすめるね。観念的な知識と生きた人間との距離のすさまじさを、確実に思い知らされるよ」

それから話は、韓国の現代陶芸や美術に移っていった。ひとくさり統制下の芸術の発展の問題を、山田の見聞を中心にあれこれ論議したあと、ちぢれっ毛の男と画家風な男とが、会があるとかで、あわただしく帰っていった。

もう五時をすぎている。食事時なので、佐伯と山田たちは合流し、その店から近頃開業した盛り場の中華料理店へ出かけていった。

新しい綺麗な店で、朱塗りの円卓をかこんで、ビールを飲みはじめると、山田の話は韓国の美人のことになった。山田の意見では、日本の女の顔立ちのことごとくが、韓国女性の中に見受けられるが、上流階級の子女の顔は、日本にはない。その上流階級の女性の美しさが抜群だと言うのである。彼は三つの博物館を訪れ、出土品を見てきたが、装飾品などの規模が日本で発掘されたものに比べて、数段とすぐれている。つまり日本に移住した韓国民族は、要するに

移民であって、上流階級の移住ではなかったというのである。
結局、山田はなんとなくコンプレックスを覚えさせられる旅をしてきたのであり、その悲哀をおもしろく語って聞かせるので、座は明るくにぎわい、あっという間に二時間ばかりがすぎ、気がついた時には、九時をすぎていた。家に電話はかけておいたが、家まで一時間ばかりかかるので、それ以上、素子は佐伯たちにつき合うわけにはいかない。佐伯と山田は調子があがり、どこかへ出かけそうな気配なので、素子は、先手をうって、これで失礼しますと、店を出たところで言った。すると劉子雲も、ぼくも失礼します、御馳走様でしたと言ったので、佐伯は、劉子雲へ、
「近いんだから、お嬢さんを家まで送ってあげてくれ」
と簡単に頼んだ。劉子雲はずいぶん信用があるようだった。劉子雲と素子は、それで一緒に、バスに乗り、まず素子の家のある停留所でおり、夜道を家のほうへむかった。市のはずれのそのあたりの家々は夜がはやく、灯の消えた家が多い。人通りも絶えている道を家へ帰りながら、素子は、抑え難い好奇心にかられて、劉子雲にあれこれたずねてみた。祖国をいちども見たことがないという話だったから、両親も鳥取にいるのかと思ったが、そうではなかった。三年前まで両親は、駅前の盛り場でパチンコ屋をしていたのだが、子雲の妹の大学進学のため、両親はソウルへひきあげて行き、子雲だけがこの市に残り、大学院へ通っているそうだった。劉子雲は、でも大学へはあまり出ません、陶芸に凝っているんですと笑いながら言った。
そのうち素子の家の門灯が見えだし、素子が、あの白い塀のむかいの門灯の家ですと教えると、劉子雲は、四つ角のところで、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c